



## ■プログラム

【敬称略】

13:50	開会挨拶	(社) 土木学会建設マネジメント委員会 委員長 福田 昌史
14:00	土木学会建設マネジメント委員会活動報告	(社) 土木学会建設マネジメント委員会 運営小委員長 森 望
14:20	基調講演「公共事業の二つの性格」	高知工科大学 理事長 岡村 甫
15:20	パネルディスカッション「四国におけるより良い公共調達と地域建設業のあり方」	コーディネーター：高知工科大学 教授 渡邊 法美
17:20	閉会挨拶	(社) 土木学会四国支部長 別枝 修

次ページ以降に、会場との意見交換を主体にシンポジウムの開催状況を報告する。「土木学会建設マネジメント委員会活動報告」、のスライド及び参加者へのアンケート調査結果は巻末に掲載している。

### 1. 開会の挨拶 (福田昌史 委員長)



初めての四国シンポジウムの開催に伴い、多数の皆様にご参加いただき、心より感謝申し上げます。

日本社会全体のパラダイムシフトの中で、建設分野でも価格から総合評価、価格から品質へと、明治以降の調達のシステム全体がはじめて大転換を迎えています。

建設マネジメント委員会では、昨年度東京で12回に亘ってシンポジウムを開催し、大変盛況でありました。

今回、初めての地方開催ということで、会場一体となって議論して、より良い調達や、四国のこれからの調達が円滑に、より良いものになるようにして参りたい。

### 2. 土木学会建設マネジメント委員会活動報告 (森望 運営小委員長)

#### ■委員会の紹介

土木学会建設マネジメント委員会は、設立が昭和59年11月であり、25年の活動である。

本委員会の主な開催行事は4つ。

#### 1. 研究成果の発表会

研究小委員会が通常研究をしている成果を発表する場

#### 2. 建設問題に関する研究発表討論会

産学官の研究者、実務者の方々が日ごろの研究成果について発表され、議論する場

#### 3. 公共調達シンポジウム

公共調達の多様な取組みについての情報交換の場。本年度より開催している。



#### 4. 建設マネジメントに関する地域シンポジウム

地域の問題について地域での意見交換をしていくということで、本年度より開催。全国で初めてのシンポジウム。

##### ■公共調達シンポジウムについて

公共調達シンポジウムは、取組みについての情報交換、あるいはグッドプラクティス、いい事例についての共有、課題の把握、今後の取組みのあり方の模索、それからシンポジウムを開催したあとも情報を蓄積して、ホームページで継続的な情報提供・発信をしていくという目的で今年度からスタートさせたものである。

また、地域シンポジウムも地域の取組みについて地域で情報交換をしていく、それから喫緊の問題、課題、地域独自の問題などの解決に向けた意見交換をするという目的で、今回よりスタートした。このシンポジウムがきっかけとなって、継続的な検討につながり、実現に向かっていくということを期待している。

##### ■建設マネジメント委員会のPR

書籍「公共調達を考えるシリーズ」の発行

##### ■国土技術政策総合研究所における建設マネジメント分野の研究についての紹介

国総研は、本省、地方整備局、地方公共団体、大学研究機関、海外、建設コンサルタント等と連携・協力しながら政策の企画・立案にあたっての科学的な根拠、技術基準の策定、技術支援などについて研究を行っている。

具体的には、公共調達制度関連では、公共工事、あるいはコンサルタント業務の入札・契約制度の改善、発注者支援では CM 方式、公共事業の効率的な実施として事業評価、PM の現場への普及、合意形成などについて研究開発している。

### 3. 基調講演「公共事業の二つの性格」(岡村甫 高知工科大学理事長)



世の中、世のため、人のために良いものを安く作るのが土木技術者の氏名であることは、いつの時代においても、またこの場所においても変わらないと思う。

しかし、何が世のために、人のためになるかということは、時代によっても、場所によっても異なるということが大事である。

使われている間、使っている時代の人のためになるものを作る必要がある。

ところが、日本では、今すぐに必要なものを造ることには賛成が得られるが、将来、役に立つものについては賛成が得られにくいのが最近までの風潮である。

##### ■建設期間短縮の重要性

私たちが忘れがちなことは、「もの」を造っている間は、それを利用する人には益することがほとんど無いということである。

例えば、50年かかって工事をすると、その間の受益者は「もの」を造っている人だけ。つまりそれ

で収入を得ている人だけである。結局出来上がった時以降にほとんど世のため人のためにならなくても、土木技術者は建設をすることによって『受益者である』というように見られる。

今、どこかのダムで 50 年も一生懸命時間をかけているのに、やめるとは何事だという話がありますけれども、『50 年かけてできないものは、もうやめた方がいい』というのが普通の人の考えです。50 年かかって造るものは、千年の歴史に意味があるものである。今生きている人の役には立たないものだと思われてやむをえないということだ。

英仏海峡トンネルは、工事開始から 3 年半後の 1993 年 6 月に開通している。この計画は 200 年ぐらい前からあった。同じように、東海道新幹線はかなり昔に計画があり、やり始めたら短い期間で造りあげた。これは意味があり、みんなに喜ばれている。ところが、何年もかけて工事を行うと、雇用対策上工事が必要だから、1 年にたくさんやったら終わってしまって工事がなくなるから、ゆっくりやりましようと言っているとしか思われぬ。したがって、建設期間を短縮することが重要であると言いたい。

### ■公共事業の二面性

公共事業の二つの側面として、一つは本当に必要な公共事業、もう一つは経済対策、あるいは雇用対策の色彩の濃い公共事業。この二つは、公共事業という名のもとで、永年使い分けされてきた。その目的の違いを明確に国民が認識できるようにするべきである。これを曖昧にしたままでは、公共事業を論じることが難しいからである。

本当に必要な公共事業というのは、国民の安全と安心が確保され、生活レベルの向上が図れる事業である。これは当たり前。

必要な公共事業にも、経済対策的な考え方を混在させると国民には理解されない。日本の場合は官公需法に基づき、中小企業向けの工事量を毎年決めている。

それを、国会等でオープンに議論して決めるのが、国民の支持を得る一つの解決方法だと思う。公の場で議論しないで、国民の一般のところで分からない形で値だけが決められ、実施の責任を負っている多くの人がいるという点が問題なのである。

つまり、経済対策的なものと真に必要で早く造らなければいけないインフラを、概念的には区別しているわけである。それを堂々と国会の場等で（議論を）やって、『多少（金額が）高くなってもしょうがない』、あるいは『（工期）が遅くなってもしょうがない』、とうのを皆が認めた上で行う。そうすれば、（誰もが）自ずと（インフラが）必要だと認めることになるのではないかと思う。

### ■ダンピング

ダンピングを許すと、資本主義経済が成立しないほどのルール違反であるが、それを認識している日本の経済人は少ない。日本人は安く売っておいて、相手を潰しておいて、後から高く売るといのはおかしくないと思っている人が多い。それは、実はお金がなければ泥棒をするというのと同じだという意識がないのである。泥棒というのはルール違反ですね。ダンピングは、資本主義社会ではルール違反なのである。ところが、ダンピングは泥棒とは違うという認識があるわけです。

今、建設業界ほか、日本は、資本主義社会が崩壊するような恐れを持つところにいつているわけである。

### ■地方活性化

日本の将来を考えると、地方からの人材流出が大きな問題となっている。1956 年から 1985 年の 30 年間で、四国 4 県から転出した数は転入した人の数を約 80 万人上回っている。

地方の活性化は『人』です。

お金をかけて、子供を育て、都会に送り続けているのが地方です。現状では、四国は中央の属国に過ぎない。国土交通省四国整備局を見ても、局長は 1, 2 年で交代する。それで腰を据えた施策がで

きるかと問いたい。『地方に主権と権限を与えて独立国にするほかない』というのが、20年前くらいに（私が）言っていたことですが、今の地方にはそれがない。独立国にするぐらいの権限を地方が持ち、苦しいけれども、自らが自らの力でやっていくということがなければ、地方は衰退し続けると（私は）20年前くらいから強く思っている。

100年や200年前は中央にある程度、もちろん集権ではあるが、本当の意味の地方分権があった。そこは、貧しいところは貧しい、富んでいるところは富んでいるというのはあったと思う。しかし、いずれにしても、苦しみを乗り越えて、自分たちが切り開いていくという人が多くなると、地方の活性化はないのではないだろうか。

もし、地方に権限があるとなれば、そして地方が本当に苦しいというのが分かれば、（元々その生まれの人は）そこに帰り、そこで生きていきたいと思うこともあるはずである。四国もそのようなこともあるのではないかと思います。

#### 4. パネルディスカッション「四国におけるより良い公共調達と地域建設業のあり方」

(渡邊) 本日の論点といたしまして、1番目、地域建設業の役割というものを変更して再確認したい。2番目は、総合評価方式の課題と改善点について、皆さんと話し合いたい。そして3番目に、地方自治体で評価方式を導入するためにはどうしたらいいのだろうということ、一緒に考えていきたい。

そして、これらの論点を受けて、最後に、提案。明るい将来を築ける、それにつながるような提案というものを、われわれで話し合っていきたい。では、地域建設業の役割ということについて姫野さんからお願いします。



コーディネーター：渡邊法美 (高知工科大学)



姫野敬行 (四国建設青年会議所副会長)

(姫野) 地域の建設業とは、地域に対する密着度ではないのかと。地域をお客さんとしている建設会社とすれば、当然地域からのニーズを受けて、できる範囲で一生懸命取り組んでいるというような現状があり、営利企業であるという側面と地域のお客さんからのニーズをどうやって両立していくのかという部分が、今大変悩ましい。



滑川達 (徳島大学大学院准教授)

(滑川) 今日のテーマの「地域の建設業」ということで言えば、「地域のため、地域住民のために良いものを安く造る」と。

姫野さんの表現で言うと、「地域全体がわれわれのお客さんなんだ」と。つまりお客様として、自分たちは営利企業として企業努力をし、サービス提供をする。

企業としての企業努力というプロセスの結果として、それが地域のソフトな社会基盤になっている。

ただ、企業努力にしても、サービス提供にしても、当然コストがかかっている。防災対策、維持管理、このようなものについても非常に分かりづらい。この分かりづらいコストを、どの程度、どのような形で、どのような方法で、いわゆるお客様だと思っている地域が支払ってい

くのか、あるいは企業がそれを対価として受け取っていくのか。

その中の一つの形、あるいは方法というのが、今日のこれからの論点の流れの中の総合評価ということなのかなと思って、参加させていただいています。

(小池) 地域の建設業の役割という点から言いますと、地域の企業の皆さんがたに担当していただいている分野というのは、地域の状況に精通しているということ、普通、皆さんがたが持っている技術で対応できるような工事の特性に合ったもの、工事に対しては、地域のことを分かっていることで、かえって大きな会社よりも良質な工事を、結果的に経済的な施工をしてもらうということで、公共工事そのものの品質の確保ということで、貢献をしていただいていると考えています。



小池剛 (国土交通省四国地方整備局企画部長)

ですから、工事の規模と技術的難易度のようなもので、うまくバランスというのですか、階層が分けられてきたのではないかとこのように思っています。

(木下) 先ほど小池部長のお話にありましたけれども、やはりその地域の事情に精通したり、さまざまな仕事をするうえで非常に効率的に仕事ができるような企業が、それぞれの地域にいらっしゃり、より効率的に、住み分けして、これまでの行政公共調達の仕組みができ上がっていたのだと思います。



調達という概念の前に、公共投資の地域政策の考え方があって、「1カ所どかんとできるまで、ほかのところは、じゃあ、全部辛抱させるの？」というようなことである。それぞれの地域を少しずつ良くしていこうというような、これが政治的にもすごく合意が取れやすかったというようなことだろうと思います。でも、それもこれから問われるということではあると思います。

木下賢司 (建設マネジメント委員会副幹事長)

大事なものは、変な競争力ばかりが強くて、実質的に技術の優れた、経営の優れた、そのような社会に有益な企業。

そのようなのに、どうも社会的貢献が何だかんだというすごく、世の中はそれを求めているのだけれども、それを、ちゃんと評価されないと、そこにコストがかかっている企業は、価格競争だけでは大変ではないかと。

(渡邊) 第2番目の論点、総合評価方式の課題と改善点について、ちょっと論点を移していきたいというように思います。



(中村) 香川県の総合評価は予定価格を公表している。総合評価に対して予定価格を公表する正当性があるのか。

最近、周りの県の状況が大分予定価格の公表を控えてきたと聞いておりますので、このあたりを考えていただけたらどうか。

また、香川県の中で、総合評価の中に表彰に対する評価点があるのですがけれども、表彰をここ 何年も香川県はやめておりますので、やめたものを入れるのはちょっとおかしい。やはり、いい仕事をしたものには、いい仕事をしたという評価をいただきたいから、表彰をまた復活していただけたらありがたい。

中村敏浩 (四国建設青年会議理事)

最近工事の点数が非常にウエートが大きくなってきていると思う。工事に対して、規模とか、難易度とか、工期、やはりそのような総合的な判断のうえで点数をつけていただきたい。

今非常に工事成績が至上主義になってきておりますので、正当な評価をいただきたいと思っている。

(木下) 地域の皆さんが、地域に残っていただきたい企業というのは何だという、そこに評価が得られて、このように価格とそれ以外の技術力なりを総合的に評価すれば、このような企業が残ることになって、それで、それが皆さんの幸せですよというようになれば、それはそれで一つの方策だと思っています。

ただ、評価はすごく難しい。抽象的な概念は幾つもあるのだけれども、それを具体的な数字に置き換えるということがすごく難しく、発注者のほうはすごく悩みますね。逆に具体的な提案なりがあれば、どんどんむしろされたいのかと思います。

(渡邊) 発注者の皆様からのご意見はございますでしょうか。

(小池) 四国においては、関東地整に引き続いて全国2番目を目指して、今、建設業関係の企業の皆さんがたのBCPの認定制度を立ち上げて、動かしつつある。

できれば、その認定した結果を、今年度内に総合評価のカウントという方向で試行にまで持っていければというように考えている。

一方で、BCPそのものは企業の経営資源の見直しをするという企業の体質改善のような効果があり、当然そのような体質が改善されている企業が工事をすれば、経営がしっかりしているということでもあり、結果的に品質が良いものとか、それからパフォーマンスの良い成果を出していただくという、両方の二面性がある。地域防災力と企業の体質という面で、総合評価となじみがいいと言ったらいけないのですけれども、導入しやすい部分があるのではないかと考えている。



坂本良一（高知県土木建設検査長）

(坂本) 四国などで大きくとらえたようなときには、防災力をどのように点数に反映していくかというのは、非常に難しい点があるのではないかとわたしは思っている。

(滑川) 地域の建設業が今後どうなっていくか、地域建設産業ビジョンのようなものがちゃんと整備されていくこと。これは間違いなく必要だと思います。

マネジメントの基本は、「今、今、今、時々将来」だと。今、ここ例えば5年の間に、そこまで準備して、そのようなことができるのかと。でも、今のことも考えておかないといけないし、当然将来のことも考えておかなければいけないとして、今そのような、いわゆる企業の防災力といいますか、結局地域にとってそれは必要なことですから、維持していかなければいけない。

そのコストを払っていく方法として、総合評価以外に僕は浮かばないのです。

(木下) 総合評価というのは企業評価の話ですね。

地域防災力を維持する云々というのは、例えば消防車などというのは自治体が持っています

ね。どのような方法がより現実的かという議論はあると思う。

(渡邊) 建設機械のやはり活用を効率的・効果的に実施していくことがこれから大切だと。それで、そのような建設機械活用懇談協議会のようなものをやはり地域で立ち上げて、それは行政、施工業者、そして関係団体のかたがたに協力していただいて、そうした防災時には迅速に活動できるような、そのような体制を作っていくべきではないかと。

これは総合評価の中に入れたほうがより効率的・効果的にできるのか、あるいは別のやり方がいいのかというものは、やはり中長期的には今後の検討課題になる。

ただ、建設BCPには建設企業経営の体質改善ということと、あとはやはり災害力の向上という二面性があるから、総合評価方式に入れてみて、試行してみて、その評価結果をモニタリングしていこうというお考えは、わたしはよく分かったように思う。

(高知工科大学 理事長：岡村) 今の議論は、一般の人には分からない。総合評価というのを、わたしは何のためにやっているのか分からなくなってしまう。

一番いい、確かな人を選ぶだけの話が、いや、こういう人を育てていきたい、こういう人を残していきたい、この会社は存続させていきたいというようなほうにいくと、では、それをちょっと間違えると、ある企業を育てるためにその業者に発注するという論理になってしまう。それは非常に危ない論理だ。

総合評価を検討されるのはいいが、何のためにやるかを、原点を外して、どんどん良くするためにいろいろなものを入れていかない。

(小池) BCPが広く広がっていて、つまり入り口の本当に資格審査といいますか、資格の条件として設定できるような条件であれば、おっしゃるとおりだと思う。

地域の防災力にも当然貢献するという中で、まだ普及段階ですから、これは持っていなければ、欠格だとか、失格だとかいうようなレベルではない。

また普及の状況に応じては、総合評価から外して、本来の資格認定といいますか、入り口部分を絞るような条件・要件になっていくかも分からない。

その中でより能力を持っていて、それから品質を確保できて、なおかつ地域の防災にも貢献できるような企業のかたを選定する。そのような項目として選んでいるということだと思う。

(岡村) 先ほど言われたように、もう継続できない企業は排除するというなら分かるのです。けれども、その危険度を点数に入れるとなった瞬間に、怪しげになるのです。

それをどうやって、何点に判断して、どうしてというのが、し意的になる可能性があるわけです。

つぶれる会社に発注しないというのは分かるのです、だれでも。けれども、10年後につぶれるかもしれない会社に発注しないというのは、あるいは発注しないといいますか、5年後につぶれるかもしれない、10年後につぶれるかもしれないことによって点数を変えるというのは、分かりにくい。

(委員長：福田) わたしは地付きの感覚で言うのですけれども、BCPの話などはやはり産業政策で取り扱うのか発注行政で取り扱うのかの視点なのだ。

より良い調達をするためのツールに、産業政策的なことを随分考えてきた。だから、非常

にそれは国民から見たら分からない、分かりづらい話で、より良い調達とは一体何なのかと、それを具現化するのが発注行政。

ところが、国土交通省、建設省時代から、産業行政でできないことを発注行政で随分やらされたわけだ。

低入施工体制確認型で排除してくれと言うでしょう。僕は間違いだと言ったのです。入札行為と契約は別なのだから、別の時点で低入はやるべきであって、入札時点でそのようなあほなことをするのはおかしい。

より良い調達とは何なのだということから、発注者としていい調達をしたいという観点で議論を絞って、そのような中で、今おっしゃっている防災力ではないと、本当にそうなのかということ、やはり、先生流に世の中に問うてみたらどうですかということなのだ。

地域存続とは一体何なのかということ、いろいろな切り口で、安全とか、安心だとか、雇用だとか、いろいろなことで出てくるわけだけれども、そのような整理でやってみないと、岡村学説にはなかなか対応できないぞ。

(渡邊) 今の岡村先生と福田委員長からのご意見に対して。

本当に技術者もいないかもしれない、そのような地方自治体において、総合評価方式を導入することの効果とか価値というものは本当にあるのか。そのところを、やはりわれわれはこのテーマで少し考えてみたいというように思います。

(坂本) これは、いわゆる建設業の経営を圧迫する要因としたものを少し改善していますし、当然跳ね返って品質への支障とか、あるいは下請けへのしわ寄せとかというものの改善につながっているかとは思っています。

年々総合評価方式の導入を増やしていますが、やはり事務処理に有する時間、マンパワーが必要なのです。

一般競争に比べて大体7日程度、時間にして22時間から23時間の労力が必要だと、1件当たり。これは、県の各土木事務所全部にアンケートを取りました結果です。これは、このようなことがどんどん増えたら、労力がかかる。一方、行政としての県のスリム化でどんどん人が減る中で、非常に苦しいところがあるのも事実でございます。これは課題です。

2点目は、施工計画の提案を求めたとき、土木一式では評価をどのようにしていくかという、非常に割と同じものあり、例えば、品質管理はコンクリートと決まっているので、非常にそうした議論するときに、議論がマンネリ化すること。

そして、入札後には入札に参加された業者さんに点数だけ公表している。3点目として、内訳の公表により、これはこのように書けば点数をもらえとなると、総合評価の本来の趣旨から離れて、それをまた個別項目ごとにマニュアル化されていくと、何の意味もなくなるので悩ましい。

4点目は、逆転入札が何件か起こっています。逆転の適切な範囲というのはどこなのか。

5点目として、総合評価方式を(平成)19年から本格的にやっています。この総合評価をやったことによる成果というのは一体なのだというところ、一定の評価をしていくようなことも必要ではないかと。

渡邊先生が言われた、現状の導入と課題は、わたしは今のところこのように考えてございます。

(渡邊) それでは、今回のパネルの大事な論点の一つであります、非常に小規模な自治体における総合評価方式の導入の状況につきまして、いの町の濱田課長、よろしいでしょうか。

いの町の濱田課長には、このシンポジウムの意見交換会にも毎回出席していただきました。自治体の総合評価方式導入のトップランナーとして随分とご経験されていらっしゃると思いますので、そのご苦労と成果についてご紹介していただければというように思います。よろしくお願いたします。

(濱田) いの町の濱田でございます。  
いの町では平成 19 年から 3,000 万以上の分を超簡易型ということで行っております。

件数が、19 年に 3 件。それからあと 5 件。それから今年が 6 件ぐらいですので、事務的な分は、思ったほど時間はかかっていない。

工事成績で点をつけるのですが、どうしても 500 万以上につけています。基本的に工事成績で点数をつけるということのプレッシャーの中で、仕事の品質は上がっているというように実感はしております。

あと何年かしたら成績評定を入れまして、本当にいい仕事と悪い仕事ということで点をつけることによって、競争性ができてくるのではないかと。地方としては、今議論されるほんの少しですが、頑張っているところでございます。

(渡邊) 濱田課長、もう一回、恐縮なのですが、ほかの市町村では、総合評価方式というものが本格的に導入されていない状況があるのですが、いの町さんでは、なぜこれほど多くの施行、そして次回は簡易型まで実施できるのか、その理由をちょっと教えていただけますでしょうか。

(濱田) 基本的には、もう町長の方針でございます。

(渡邊) なるほど、そうすると、この方式を導入して、先ほどのお話にもちょっとありましたけれども、効果はやはりあったというようにお感じでしょうか。

(濱田) やはり、先ほども申しましたけれども、成績評定という分で、地元のほうもやはりいい仕事をやってもらいたいという分は同じでございますので、点数をつけるということになったら、やはり皆、力が入ってくるというように思っています。それで、成績、いい仕事にはなっているという感じでございます。

(渡邊) やはりこのような小規模な自治体で導入が進まない理由というのは、どのようなところにあるのでしょうか。

(小池) 品確法ができたあと、ほぼすべての市町村の皆さんがた、各県、それから国の出先の発注機

関が集まって協議会を作っております。

その中で一つ目標を立てておりまして、総合評価を一つでもやってください、そのための制度を導入してくださいということで、100%を目標にしつつ、今年度末には93%ぐらいと、9割を超えるような市町村で導入をしていただいている。

まずやってみていただければ、メリットというのは感じていただけるかなというように思います。

ただ、先ほどご指摘がありましたような、手間がかかるとか、人材をどのように確保するのかとか、また項目についてどのように考えていったらいいかというあたりについて、これは制度の話とか仕組み全体の話です。

われわれとしても最大限できることは努力をして、全部の市町村に導入できて、広がっていくような、そのような仕組みを進めていきたいというように思っています。

(渡邊) パネリストの皆様、やはりこの方式を普及していくためには、もう少しこのような工夫をしたらいいのではないかなというご提案はございますでしょうか。どうでしょうか。企業サイドから、もしございましたら。

(中村) 坂出市はなかなか、工事成績の点をつけて見せてくれない。

なぜ、いい仕事をしたか、悪い評価、仕事をしたかを、もうちょっと、優・良・可ぐらいだったのかな、そのようにきちんとした点数を現場に対して評価したら、そこからまた次に一歩進んでいけるのではないかなと思う。

(坂出市：市長) わたしも、6月に市長になったところなので。今、建設業とも、癒着ではありませんが、お話しすると。業界は大変だということなのですけれども、業界の努力だけでも足りないけれども、このような時代だから、業界でやはり知恵を出し合いなさいということは、先般もアドバイスしたところでございまして。

今ちょうど勉強しているところの最中なので。ちょっと目と目が合いましたので。最近、業者とあまりアイコンタクトは取ったらいけないことをいわれております。業界とお話をさせていただきたい。前を向いてけっこう前進するほうですから、よろしく願います。

(渡邊) 突然のお願いにもかかわらず、どうもありがとうございました。

行政と企業さんだけではなくて、学会という組織もございまして、そうしたところが一体となって検討をしていくことも有益ではないかというように思います。

それでは、だいぶ時間も押してきたのですけれども、ここで少し、この議論をフロアの方にちょっと移したいというように思います。

(会場) 今日、全体のシンポジウムの議論を聴かせていただきまして、何点かちょっと、わたしなりにご意見を申し上げたいと思います。

防災力を、建設業者が議論することなのだろうかという素朴な疑問があります。

これは、あえて言えば、建設業者が持っている防災に対する能力というのは確かに保有している。これは、公共事業が減少していく中では、当然人も機械も減少していくことは避けられないと思うのです。

しいて建設業者が持っている力を地域防災に用いようということであれば、行政と建設業者に限定するのではなくて、例えば回る発電機を持っているリース屋さんも含めてネットワーク化させて、そして、その防災力グループのようなものを組織したら、緊急時の対応なども当然減っていく、機械とか人は減っていくわけですから、そのような考え方に立てば、安定的に供給ができるのではないかというように思います。

そもそも、先ほど委員長さんからもご発言がありましたように、わたしも、入札・契約という調達の部分と、それから、いわゆる建設産業政策というものは、どこかでやはりはっきり切り分けて議論をしないと、ますます分からなくなっていくのではないかと。

それから、何かを評価するとき大切なことは、やはり公平性の担保ということではないかと思えます。これは入札・契約制度にしても、それから経営事項審査制度にしても、全く同じでありまして、定量化できないものを用いますと、かえっていびつになってしまう。

納税者から見てどう見えるのだろうかということを、いつもわたしたちはこの種の議論をするときに忘れるべきではない。

納税者から見れば、多分全く分からない議論だと思うのですね。それで、いいものを安く造ってくれる業者でいいと多分言うと思うのです。一番の原理・原則的な視点をやはりいつも視座から外さずに議論をすることが、大切なだろうというように思います。

最後に総合評価方式について申し上げますと、地域の防災力が、例えば業者数と関係があるというような論点で言えば、総合評価方式になって入札に参加できなくなったという業者さんが、けっこう地方には多いのです。

ですから、総合評価方式、もしくは発注制度で考えるのであったら、衣食住という生活の3要素を支えているのは、やはり安全とか安心だというように位置づけるのだったら、ローカルの業者がもう少し受注機会を増やしていけるような。

納税者が、より良いものをより安く買いたいという考え方なのか、いや、良いものをより安く買いたいということであれば、これはやはり、このところの切り分けということは、今後総合評価方式を運営するうえでは、大いに議論をしておく必要があるのではないかなというように思います。

以上でございます。

(渡邊) それでは、残り10分になりましたので、最後の論点、「提案」ということで、早急に実施すべきこと、そして中長期的に実行を検討すべきものというようにお題を出させていただいている。

(中村) 子供たち、未来を任せる人に夢を語れるような、そのような業界にしていかなかったら、決してこの業界は続いていかない。続けけれども、夢がある世界にはなっていないと思うので、そこをどのように考えていくか、どのような方法で私たちが未来を任せる子供たちにやっつけられるか、そこをもう一度考え直して、今からのいろいろな問題点に対処していきたい。

(姫野) 賛否はあるものの、防災力の評価を四国地方整備局として初めてやっていく。

やっていく中で、それを総合評価方式、もしくは何らかの発注行政に生かしていくという話になれば、実際の、当初の目的である防災力が本当に担保できているのかどうかというところが、けっこう課題になるかと。

(滑川) いわゆる発注行政というものと、産業政策というものをきちんと分けて考えて。ぜひこのような場をまた継続してほしいということでございます。

(坂本) 短期的には、いろいろな施工評価提案があったときに、「これもいいよね、これもいいよね」という評価のほかに、この提案がものすごくいいとかという深さを、もう少し評価の方法として、そのような工夫として、いろいろなことがあってもいいのではないかなという気がしています。

(小池) 今日のシンポの中で一番こたえたご意見は、技術評価がマンネリ化しているということでありまして、これは、入札・契約制度の改革をわれわれ進めてきた者が、改革が立ち止まった瞬間、やはりマンネリといわれてしまう。その中でいろいろな問題が出てくるのだろうなというように、これは非常に反省をしているところであります。あらゆる分野について、マンネリと言われないような努力が、われわれとしては必要かなと思いました。

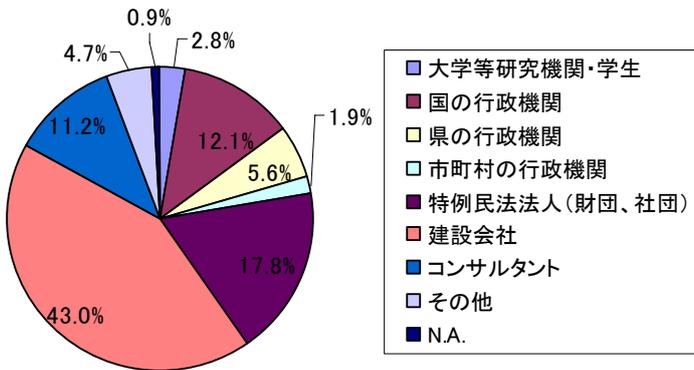
## アンケート結果

### ◆有効回答

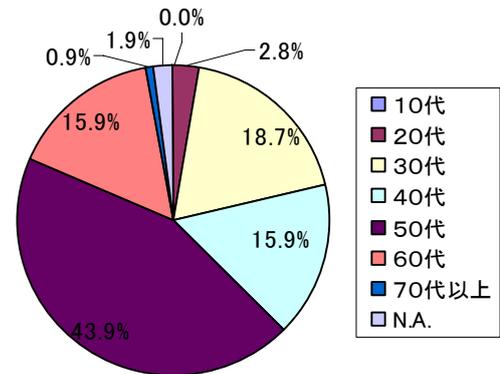
本アンケートの回答者数は 107 名でした。

### ◆参加者属性

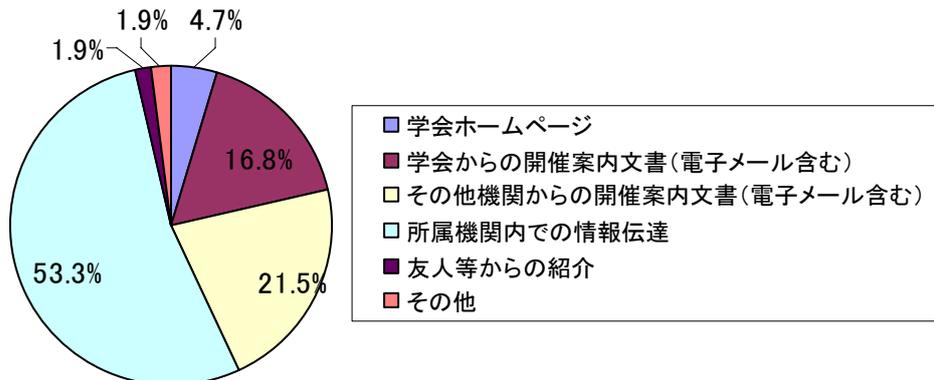
#### 1) 職業



#### 2) 年齢



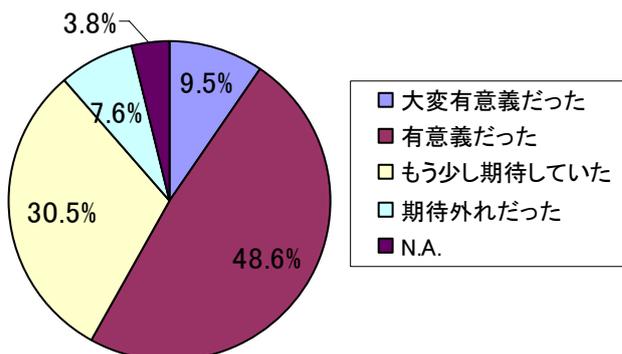
### ◆シンポジウムの開催を何によって知りましたか



#### その他内容

内容	度数
建設コンサルタント協会四国支部より	1
四国建設弘済会にて	1

### ◆今回のシンポジウムの感想



## 《感想に対するそれぞれの理由（意見）》

### ◆基調講演に関する意見：

- ・ 岡村理事長の「原点に返れ」論と、福田委員長の「産業政策的行政」と「発注者行政」の話し  
が聞いたことがよかった
- ・ 岡村先生の基調講演にて公共事業の行く末を知ることができた。
- ・ 産官学それぞれの立場で現状の生の話しが聞いた。岡村先生、福田委員長の話が興味深かった  
(もう少し詳しく聴きたい)。

### ◆パネルディスカッションに関する意見

- ・ いろいろな立場からのいろいろな意見が聞いた
- ・ パネルディスカッションでは産（建設業）学官という形で議論となり、立場の違いで異なる考  
え方をぶつけ合う場面もあり視点を変えての話しがおもしろかった。
- ・ パネルディスカッションの議論が良かった。市町村等の実態がわかった。本音の議論が聞いた  
と思う。
- ・ パネルディスカッションの内容が地元中小企業に偏った感がある。パネリストに大手企業、コ  
ンサルタントも参加させたら良いと思う。

### ◆地方開催に関する意見

- ・ 地方での開催であったこと。地方にテーマを絞ったことがよかった。

### ◆今後の課題や方向性に関する意見

- ・ 公共事業がおかれている立場と、社会変動（高齢化問題など）による問題がわかった。それによ  
り、今後の課題が浮き彫りになった。
- ・ 最新の調達方法の今後の方向が聞いた。また、課題も聞くことができた。特に異論など。
- ・ 将来の建設業のあり方、公共工事の進む方向がわかった。

### ◆会場設営に関する意見

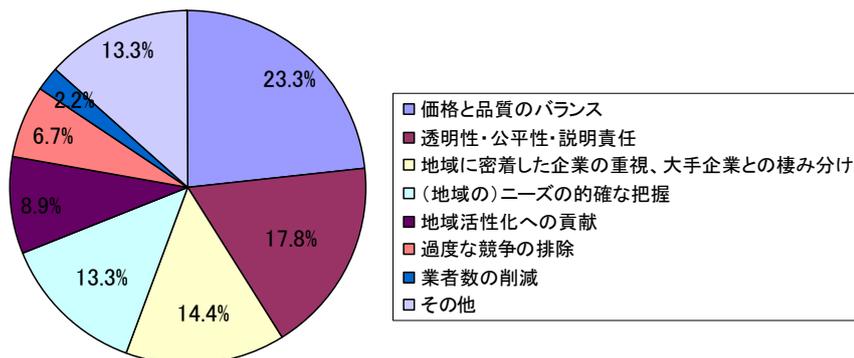
- ・ 会場でのマイクからの声が聞き取りづらい

### ◆情報発信に関する意見

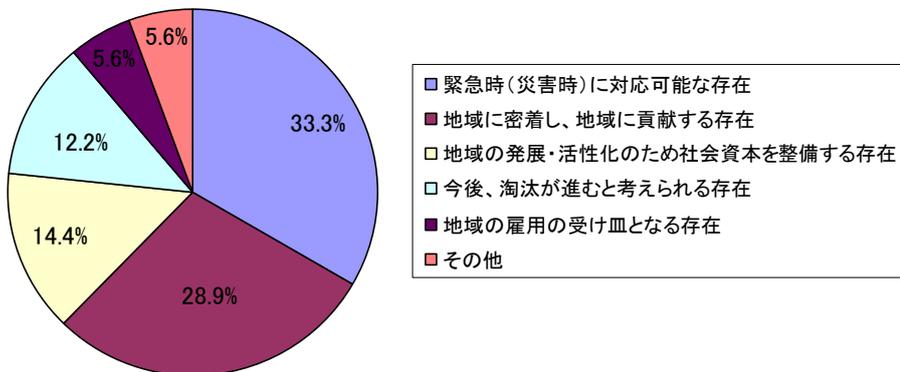
- ・ 一般への発信だけでなく業界内だけの認識範囲で終わったような感じである。
- ・ 公共調達周辺の関係者のみではなく、マスコミ、一般人をも参加させての議論でなければ、将  
来の道標とはならないのではないのでしょうか。

### ◆ 四国でのより良い公共調達と地域建設業のあり方について

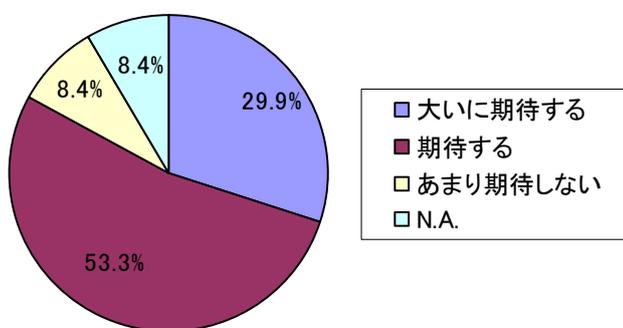
#### 1) あなたが考えるより良い公共調達とは何ですか



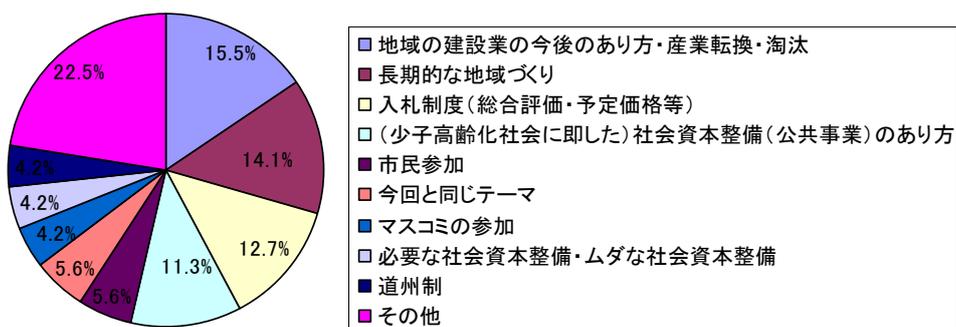
2) あなたが考える地域建設業のあり方とは何ですか



3) 今回のような議論，検討が継続的に行われることについてどう思います



4) 今後，同様のシンポジウムを四国で開催するとした場合，どのようなテーマ（内容）が望ましいと思いますか。



## 四国における公共調達に関するシンポジウム アンケート調査票

資料1

本アンケートは、記述していただく部分が多くなっていますが、今後のこのようなシンポジウムや建設マネジメント問題に関する議論の参考にしたいと考えていますので、ご協力よろしく願います。

### 1. 参加者の立場等

#### 1) 職業等

ア) 大学等研究機関・学生      イ) 国の行政機関      ウ) 県の行政機関      エ) 市町村の行政機関

オ) 特例民法法人（財団、社団）      カ) 建設会社      キ) コンサルタント      ク) その他

#### 2) 年齢

ア) 10代、      イ) 20代、      ウ) 30代、      エ) 40代、      オ) 50代、      カ) 60代、      キ) 70代以上

### 2. シンポジウムの開催を何によって知りましたか

ア) 学会ホームページ      イ) 学会からの開催案内文書（電子メールを含む）

ウ) その他機関からの開催案内文書（電子メールを含む）      エ) 所属機関内での情報伝達

オ) 友人等からの紹介      カ) その他〔具体的に：      〕

### 3. 今回のシンポジウムの感想

ア) 大変有意義だった      イ) 有意義だった      ウ) もう少し期待していた      エ) 期待外れだった  
その理由は何ですか。

[      ]

### 4. 四国でのより良い公共調達と地域建設業のあり方についてお尋ねします

1) あなたが考えるより良い公共調達とは何ですか。

[      ]

2) あなたが考える地域建設業のあり方とは何ですか。

[      ]

3) 今回のような議論、検討が継続的に行われる（シンポジウムかどうか形式は問わない）ことについてどう思いますか。

ア) 大いに期待する      イ) 期待する      ウ) あまり期待しない

4) 今後、同様のシンポジウムを四国で開催するとした場合、どのようなテーマ（内容）が望ましいと思いますか。

[      ]

ご協力ありがとうございました。

なお、今後、建設マネジメントが開催するシンポジウム等行事の開催案内等についてメール配信をご希望される方は、メールアドレスをご記入下さい。（他の用途での使用は一切いたしません。）

メールアドレス \_\_\_\_\_ @ \_\_\_\_\_